①右：谷文晁

①左：谷文一

15　東都時名画帖　谷文晁ほか　二帖

江戸時代、文化十四年（一八一七）頃

①「山水図」　文化九年（一八一二）
右：谷文晁　絹本着色　二七・八×一七・八
左：谷文一　絹本墨画淡彩　二七・八×一七・八

②「山水図」　文化十年（一八一三）
渡辺玄対　右：絹本着色　左：絹本墨画
右：二七・八×一八・七　左：二七・八×一九・〇

③「山水図」
大岡雲峰　右：絹本着色　左：絹本墨画淡彩
右：二八・〇×一九・二　左：二八・〇×一九・一

④「山水図」　文化十二年（一八一五）
山本梅逸　絹本墨画淡彩
右：二七・五×一八・九　左：二七・五×一九・〇

本画帖は、乾坤の二帖からなり、乾帖の巻頭を福山藩主・阿部正精（一七七四～一八二六）、坤帖の巻頭を伊勢長島藩主・増山雪斎（一七五四～一八一九）という学芸にその才能を示し、文人として知られる二人の藩主による賛があり、続いて花鳥図と山水図、美人図や羅漢図などを取り混ぜて、乾帖には表裏二十九図、坤帖には三十七図が展開する。その画は、谷文晁（一七六三～一八四一）を中心とした三十人余の文人画家らによる。その中から、今回の展示では、五名による「山水図」八図を紹介する。全六十六図の中の年記は、文化六年～十四年までで、本帖に作品を寄せる画家たちは、文晁が主宰した画塾写山楼や書画会に参加した人たちであることから、その環境の中で制作されたものであることが確かである。

本帖制作の頃の文晁は四十歳代末から五十歳代前半、意欲的な活動を行っていた時期である。文晁の「山水図」は、中国画の多くの摸写を通じて学んだ図様や描法に、彼らしい明快さ、しっかりとしたイメージが加味されたもので、その熟達した画趣が漂う。それに対しての息子、文一（一七八六～一八一八）の図は、中国画の学習をもとに、筆線の抑揚を巧みに用いて細部まで神経が行き届いた丁寧な描写で、作画に対する真摯

②左：渡辺玄対

②右：渡辺玄対

な態度とその十分な画技が感じられる。緊張感のある描写ながら独特の情趣を漂わせている。文晁と文一の見開きで、青緑山水と水墨山水の妙、夏景と冬景を対比させている。

渡辺玄対（一七四九～一八二二）は、文晁、そして本帖に「売貨郎図」を寄せる渡辺崋山に影響を与えた文人画家である。玄対六十五歳の晩年期のこの図は、中国の明末清初の画家・藍瑛の作品に執心して摸写を繰り返して山水図を多く描いた玄対の習熟した画風が窺える。やはり左右で青緑山水と水墨山水を対比させている。

大岡雲峰（一七六五～一八四八）の二図もまた、中国画の学習によるもの。右図は穏やかな明るい日射しのもとの山水図であろうか、青緑山水を意識して樹葉や山肌に緑色をさし、柔らかな曲線を多用する。これに対しての左図は、雨にけぶるしっとりとした景色で、墨画を基調として舟上の人物の着衣に色をさすのみ、直線を多用する。明確に、色彩、描法によってそれぞれの景観の情趣を描き分けている。

そして、尾張で活躍した山本梅逸（一七八三～一八五六）の三十二歳の二図も注目される。墨画による細緻な表現は、中国画に学んだであろう画面構成ながら、実景を強く意識させる構図である。本図の存在によって、彼が江戸に滞在し、文晁と交流したことを確実に物語ることになり、その点においても、本図は貴重な作例である。

本画帖には、文晁の元に各地から集った画家たちの作品が収載されている。江戸と地方との往来が盛んになった中で、古画や中国画の学習によって得た画面構成や描法に、画師たち自身の目と足によってとらえた実景を重ね、その作画活動を展開していったことを本画帖は示していよう。

③左：大岡雲峰

③右：大岡雲峰

④左：山本梅逸

④右：山本梅逸

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ――情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録No.76

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan